岳　11　月

宮坂静生
推　　薦

戸口よりすぐけものみち避暑名残　国見敏子
秋日燃えたる難民の子の瞳　奥山源丘
蹴飛ばしに黄身よく絡む冷し酒　満田光生
菱採りの去りし沼面の整はず　大野今朝子
月光を浴び花のごと火焔土器　佐藤　健
一筋はわが身の内に秋の水　中里　結
星流る儒艮の去りし辺野古灘　渡嘉敷皓馱
天上に還らんと瀧落ちにけり　長尾裕美子
じやがいもに土寄せるごと晩年は　長崎玲子
炎天の奥へまなざし翁長氏逝く　河西　将
燃え尽きる幸せのあり曼珠沙華　増田信雄
山鳩のこゑしばらくの秋ここち　玉木愛子
茶会記の抑えとなりぬ新松子　寺地和子
李祭烏団扇の風を受く　河西久恵
鏡の裏覗く幼子休暇果つ　小林冨久江

*

納棺の所作の乙張（めりはり）ほたる草　橋本幸篤
綿虫に彼の世へ押されてはゐずや　中岡草人
曼珠沙華一花ごとに拝み過ぐ　田村道子
指笛や稲霊招く祝女の秋　田添博美
秋風や口笛ひゆうと土偶たち　雨宮桂子
満天は星の螺鈿よ草の市　志摩晴樹
星月夜湖の底ひを照らしをり　水野星闇
戦争は黒くちなしの白さは無　薦田のり子
星まつり椀の見込の砂子かな　平野規子
濁流の泥にまみれし生身魂　宮川志津子
冷房車傾いでゐたる人ばかり　瓜田紀子
貧乏の生み出す力韮の花　依田ひろ
一汁一菜山賤の良夜かな　松崎響亮
吾に母の在りし証や月に臍　竹岡みち子
人類に同じあやまち青蜜柑　吉池史江

岳半世紀へ・拓くことば　十一月 ㊶

宮坂静生

はじめに。俳句をはじめる人の投句欄として「青雲集」(せいうんしゅう)を一月号から設ける。従来の「岳集」は作句経験の長いベテランも初心者も一緒の欄なので、はじめての初心者にはとまどいがあった。岳集は「岳」の顔である。毎月の話題句が出る。広く俳句界を意識しながら、句を紹介する。そこで、岳はむずかしいという声が出ることにもなる。初心者からベテランまで、同じ土俵で上手の句を見ながら学ぶことが長い俳句人生の中では大事なことであるが、初心者が俳句になじみ易い工夫も必要なので、初心者は原則として一年間は青雲集欄で学び、馴れた後に、二年目あたりから岳集へ投句して貰う。そのような配慮をした。「岳集」投句用紙に一月号の投句分から青雲集希望者は所定の欄に○印をして投句願いたい。初心者でなくても、ぜひ青雲集からやってみたいと考える方は岳集投句用紙の裏に一言お書きいただきたい。主宰の判断により青雲集欄への投句を許可することもある。新しい企みにより岳の投句欄が活発になることを期待したい。

「戸口よりすぐけものみち」「避暑名残」が秀逸

戸口よりすぐけものみち避暑名残　国見敏子

避暑名残が巧み。作者はふだん、人生訓すれすれのところで常凡な生き方への批判を試みながら、季語の巧みな斡旋によって広く共感をよぶ場面を演出する。俳人役者とでも呼んでよい個性的な作り手だ。山中の別荘を想定したものか。夏休み中の高原暮らし、あと数日で避暑も終る名残惜しさもわるくない。

秋日燃えたる難民の子の瞳　奥山源丘

時事詠。難民の子を詠んだ句はあろう。が、その瞳に炎天や夏日でなく、「秋日」が燃えているとのぎりぎりのところを捉えた作はないのではないか。この一点に心動かされた。

蹴飛ばしに黄身よく絡む冷し酒　満田光生

「蹴飛ばし」は馬肉。どうということのない一句ながら、満ち足りた思いがもう一つ伝わらない。いうならば「冷し酒」と置いたことでわずかな満たされない思いがある。そこに私は感じるものがあった。しかし、これは立派な心足りた句だとの反論が出るかもしれない。危うさにあそぶ心で掲げた。

菱採りの去りし沼面の整はず　大野今朝子

諏訪湖や白樺湖などで秋の日に菱の実を採る。その跡の雑然としたさまを捉えている。「沼面の整はず」との否定形の表現スタイルに感覚のよさがあろう。

月光を浴び花のごと火焔土器　佐藤健

「花のごと」の比喩が美しい。縄文の火焔土器が月光を浴び、あたかもまんじゅしゃげが芯を全開した形に見える。五〇〇〇年前の造型が現代人に訴える力づよさに感銘する。

一筋はわが身の内に秋の水　中里結

もとより「秋の水」は比喩。私は生きる意志力とみたい。冷々とした清冽な秋の水。透明でもあろう。十分に春の水の情緒も夏の怒濤のはげしさも経て来た、沈着な秋の水。

星流る儒艮の去りし辺野古灘　渡嘉敷皓駄

「八月八日沖縄県知事翁長氏急逝す」と注がある。辺野古の海を埋立てて基地を移す政府の頭から押しつける政策に反対し、辺野古の海を護り通した翁長知事の逝去によって、変りゆく沖縄。「儒艮」がいなくなったとの指摘がいい。さみしさが十分に伝わる。あれもこれも言わないで、儒艮のみの例示が巧み。

天上に還らんと瀧落ちにけり　長尾裕美子

瀧の水がやがて水蒸気となり上昇し天に還る。そんな理屈ではない。落下している瀧そのものが龍のように天上に還る。迫力ある瀧だけに、そのまゝ天上へ昇天するイメージを描けよう。巧みな作として感心した。

じやがいもに土寄せるごと晩年は　長崎玲子

晩年の比喩としてまことに温かい。こんな晩年をすごすことができるとは最良の人生ではないか。炎天に土を深々と寄せられ、じゃがいもはぬくぬくと育つ。土寄せは愛情の象徴のようなもの。われはじゃがいもとの謙遜がユーモラス。作者をじゃがいもと思う人はだれもいない。

燃え尽きる幸せのあり曼珠沙華　増田信雄

今月の秀句

炎天の奥へまなざし翁長氏逝く　河西将

八月八日急逝された沖縄県知事翁長雄志氏は沖縄の千年の苦悩の歴史を背負ったような信念の人だった。一九五〇年生まれ、六十八歳。膵臓がんの抗がん剤治療に専念されながら、辺野古基地の造成を認めまいと奮闘された。炎天の奥を見つめるまなざしには、不可能でもやれるだけはやるという決意が滲んでいた。与えられた人の生き方とはそういうもの。ぎりぎりの生存の人への作者の共感に胸を打たれた。

拓くことば ㊻ 自句寸言㉚「鑽火」

秋耕の畝が入りくる家の中　平成六年

「鷹」（平成七年二月号）所載。電車の車中から、塩尻洗馬を通過した折の嘱目。耕された畝が続いていた。明るい秋の日に、開け放たれた大きな農家の座敷へずかずかと畝が入ってゆく。家人は驚いたに違いない。畝は生きもののようだ。好きな句で、よく揮毫した。『山の牧』所収。

鑽火もてわが左義長に点じけり　平成七年

「岳」（平成七年三月号）所載。「一月十五日「鷹」を退く」と前書。「岳」は独立せざるを得なかった。昭和四十三年六月入会以来の「鷹」を師藤田湘子の要請で退く。将来を考え、私は新年大会で退会の挨拶をさせて貰った。沢山の誌友が惜しんでくれた。私には師に対する感謝の気持の他、微塵も抜けたい理由はなかった。

第二次「鷹」を始めるに際し、大きくなった同僚誌「岳」をどうするか悩まれたものか。湘子は機嫌のいい時、「岳」を同僚誌と称した。思えばこんなことがあった。前年に辻桃子俳句を嫌悪した師が私の書いた「俳句年鑑」展望での桃子俳句を淡々と評した一文が気に入らなかったらしい。東京―松本の懸隔が師をめぐる愛憎に巻き込まれないで幸いした。懐かしい一齣として記した。

「鷹」を離れた翌二月十五日、第四十五回現代俳句協会賞を貰う。会長金子兜太から授与された。現代俳句大賞は平畑静塔。壇上で静塔が三高寮歌を唄ったことを記憶する。わが世の変転の始まる予感が少し。『山の牧』所収。

山之口貘の坐りし春の土　平成七年

「岳」（平成七年四月号）所載。「沖縄」と前書。沖縄琉球大学へ放送大学関係の仕事で出張した。那覇から喜屋武岬まで隈なく歩いた。二月二十二日に那覇の与儀公園での嘱目。沖縄の詩人、山之口貘の詩碑がある。「座蒲団」という詩。座蒲団に座ることで土の世界を見下ろすさびしさを指摘した強烈な詩想に感激した。同時詠がある。「波照間島へさたうきび刈赤子負ひ」「懐つこい喜屋武岬のてんと虫」「洞窟の時間ぶよぶよ百合を置く」『山の牧』所収。

鶏頭を引き鶏頭の残りたる　平成七年

「俳壇」（平成七年十一月号）所載。子規の鶏頭の句が意識にあった。晩秋に鶏頭を畑から引き抜いた。畑には鶏頭はない。が、意識からはずっと鶏頭のことが離れなかった。子規の「鶏頭の十四五本もありぬべし」の句も案外、現在の強調表現をとりながら、亡き鶏頭、喪失感を詠っているのではないか。そんな気がする。『山の牧』所収。

曼珠沙華の生態を詠んだものではない。自分自身を意識した自画像のようだが、曼珠沙華もはなやかに咲き尽きてやがて消えていく。彼岸花とか死人花と呼ばれる、人くさい花だ。きわめて近い取り合わせの句である。かえってそこが成功した一句である。

山鳩のこゑしばらくの秋ここち　玉木　愛子

山鳩の声に「秋ここち」を感じる。秋の明るい高原であろうか。ほうほう鳴く声に秋の気持をという捉え方がおもしろい。軽さに弾みがある。なにかを暗示するといった、いろいろ思わせる句ではないが、軽快さを評価したい。

茶会記の抑えとなりぬ新松子　寺地　和子

着想に発見がある。茶会の記録の抑えに新松子を置いた。只それだけである。そこに気づいた感覚のよさ。こんな身辺の些事を五・七・五の定型にのせるだけで、一片の詩が生まれる。俳句はこのように作れますよというお手本の一句。高山の女性がこのところ何人も燃え出している。その中のおひとり。リーダーの住斗南子さんが年輩者だけに、各句会の方々がしっかりとがんばっていただきたい。

李祭烏団扇の風を受く　河西　久恵

「府中大国魂神社」と注がある。祭礼を李祭という。大きな烏団扇もおもしろい。暗闇祭の句はいくつか詠まれているが、李祭の例句は少ない。ことがらを述べた句であるが、関東の代表的な祭だけに、一場の光景は目に見えるようだ。

鏡の裏覗く幼子休暇果つ　小林冨久江

壁に掲示された絵の裏がどうなっているかという平井照敏の句を取り上げ、絵の裏側の怖さを論じた一文を書いたことがある。掲句は鏡の裏。幼子ならずともふしぎを感じる。夏休み中、何回も鏡の前に立ち、鏡に興味を持ちはじめた幼子であろう。ういういしい気づきがある。

他に推薦候補作を掲げる。

たましひの張りを葡萄の肌ほどに　古畑　恒雄
銀漢や郷にさへぎるものの無く　安部　克詠
取り逃がす蟬の記憶の縹色　柏田　浪雅
秋暑し課外授業のざざ虫捕　篠遠　良子
雷鳴や亡者踊は力増し　加藤　律子
天界に通ふ舟とは浮葉かな　永島理江子

綿虫に押されとはすごい

綿虫に彼の世へ押されてはゐずや　中岡　草人

初冬の軽い綿虫に押され彼の世へとの発想は巧み。この世での重さはもうぎりぎり。自分の浮遊感は、なんだか綿虫に押されて、彼の世へ行きかけていると幻想したものであろう。中岡草人という大阪の俳人の存在はますます大きい。み

ずからも視力を失いながら障害者の教育や職業に全力を尽し、ことし八十九歳を迎える。

曼珠沙華一花ごとに拝み過ぐ　田村　道子

「拝み過ぐ」が巧い。畦に道端に群生し、死人花とも名が付けられる彼岸花。その豪華ともいえるシャンデリアのような花一つ一つを拝みながら過ぎてゆく。その所作に土俗性を生かし、さりげなく、見事な一句に仕上げたもの。

指笛や稲霊招く祝女の秋　田添　博美

沖縄など南島詠。祝女がどのように指笛をあやつるものか知らないが、「稲霊招く」とは沖縄の稲作のはじまった地を訪ねた日のことを思い、一つ一つがニライ・カナイの神の霊力によると信じている沖縄人の生き方の敬虔さに打たれる。

秋風や口笛ひゆうと土偶たち　雨宮　桂子

もとより土偶の小さな丸い口元からの幻想。秋風と土偶との取り合わせを気づいた感覚のよさがひかる。土偶はみのりの秋の祈りを象徴したものであろう。秋風にはよろこびもかなしみも、ときにあきらめも包含され、軽々とした心の重みがあろう。ひとの気持は五〇〇〇年前も現代も同じ。

満天は星の螺鈿よ草の市　志摩　晴樹

一か月遅れの八月盆。北信濃の地貌詠。盆市に売られる盆ござも盆花も仏具の類も、くさぐさが並ぶ。夕刻から夜に向う星空も華やぎに満ちる。実景を踏まえながら、完璧な天上を描き、作者の祈りが籠められた重厚な一句。

星月夜湖の底ひを照らしをり　水野　星闇

星月夜が湖の底ひまで及ぶとみた自然への敬虔さに注目した。俳号二三夫を星闇と改名。徐々に作句意欲のボルテージを上げつゝある作者。一句からも手堅さがうかがえる。

戦争は黒くちなしの白さは無　薦田のり子

「岳」の意欲に共鳴して入会された作者らしいあざやかな一句。社会詠であるが、一句には時間を超えた深遠さがある。くちなしの六弁花の白を「無」とは、戦争の「黒」の相手ではない。この世の次元を超えた永遠の白を配した点、無償の詩人の心がある。

星まつり椀の見込の砂子かな　平野　規子

隙のない絶品。飛騨高山の蒔絵を施された椀を私もしばしばみている。「見込」とは椀の内側のこと。そこに金銀箔の施しがある。七夕祭の調度品として平野家伝来のものか。

濁流の泥にまみれし生身魂　宮川志津子

いくたびも台風襲来の年。掲句は三・一一詠とも、台風禍を経た老いを詠ったものとも読める。「泥にまみれし」の表現が地に着いている。生き抜いた生命力を讃えた実感詠。

冷房車傾いでゐたる人ばかり　瓜田　紀子

電車の傾きを言いながら、冷房のためにいささかの平常心を失っている乗車人をそれとなく捉えている。鋭い。

貧乏の生み出す力韮の花　依田　ひろ

ズバリ「貧乏」詠に共感した。韮の花の勁さに相応しい。

一汁一菜山賤の良夜かな　松崎　響亮

中八音にしない工夫。原句〈山賤の一汁一菜良夜かな〉を推敲。山賤は木こりや狩人など山住みで縄文人風の暮らしを続けている人。清貧を愛する民。貧しいのではない、貧しさを愛する人である。俳号を野中威から改名。句もまた生まれ変わるか。肚を据える年代に入られた小諸の期待の一人。

吾に母の在りし証や月に臍　竹岡みち子

月夜の湯浴み。臍を見つめ「母の在りし証」を思うとはへんな人。そこがおもしろい。ユニークな身体感覚を持っている。医学部の生理学のプロ。人柄に滋味がある。

人類に同じあやまち青蜜柑　吉池　史江

三橋敏雄に〈あやまちはくりかへします秋の暮〉がある。同じ発想であるが、青蜜柑を置き、いまだ青くさい人類の永遠の未熟さを捉えたのが鋭い。

台風裡シーツの波は二人分　小林　貴子

こんな句を推薦候補にあげた。台風襲来の中、二人で台風に敗けないように抱き合っていたという極上の若々しい句。さりげなくシーツの皺に着目したところが愉快。これも青春俳句。

他に岳集推薦候補作を掲げる。

光るもの集め九月の水族館　篠遠　良子
谷川岳の深山鍬形虫をとこまへ　田中　優子
身の内に生ずる鬱も帰燕以後　小谷　一夫
秋夕焼耳のそばまで来てゐたり　真弓ぼたん
老ゆるほど露の匂ひの濃くなりぬ　倉科　繁登

今月の秀句

納棺の所作の乙張りほたる草　橋本　幸篤

納棺の折の僧侶や葬儀社の担当者の所作はもたもたしていない。「乙張り」がある。死者の縁者のかなしみを汲みながら、テキパキとことをはこぶ。一つ一つにいわれを述べ、たちまち死者をあの世へ送る芸術品、人形に仕立てあげる。「ほたる草」は彼此の境にともる花、その微妙なふしぎ。花は螢火を暗示する。亡き人を送る一句にふさわしい着想に感心した。作者幸篤さんがめきめきと腕を上げている。